

明治の佐伯三青年

龍溪・鳴鶴・鶴谷

1 城山おろし

今日も城山下ろしが、静かな二万石の城下町を吹き下ろしていた。維新の改革で明治二年にいち早く版籍を奉還したここ豊後国佐伯は、町全体が突然の改革でこれらの進路を探しあぐね、新しい生活の糧を求めかねて、息を殺したようなたゞずまいである。海拔百四十米の城山の山裾に南に広がる城下町は、武家町と商家町に区分され、所々に広場を設け、市街戦に備えて入り組んだ曲折を作り、前域には番匠川が一線を画し、佐伯湾に注いでいる。海と山と川に囲まれたこの藩祖毛利高政以来の城下町は、現在大分県南の文化経済の中心地として発展している。このリアス式海岸の風光明媚な城山と番匠川で代表される佐伯は、明治廿六年藩校の流れを汲む鶴谷学館で教鞭をとった国木田独歩によって全国に紹介され

東京 御手洗一而

た。明治廿八年五月から六月にかけて、国民新聞に『豊後の国佐伯』として、次のように書かれている。

三十年の昔は茲に封建の古城立ちぬ。城市の民は月と日を灘山の肩に迎へて、之れを古城の背に送りぬ。今は残す処たゞ其の石垣のみ。石垣の上、建物の有りし跡は今尚ほ平坦なり。雑草茂り、松生ひ立ち、灌木入り乱れ荒廢に任かせり。

満山の樹木暗く繁りて、幽径縦横、猿の如き少年も時に迷ふ事ありと聞きぬ。

余が初めて佐伯に入るや先づ此の山に心動き、余已に佐伯を去るも眼底其景容を拭ひ去る能はず、此山なくば余には殆んど佐伯なきなり。(略)

城山寂たる時、佐伯寂たり。城山鳴る時、佐伯鳴る。
佐伯は城山のものなればなり。

又番匠川については、

高きに登りて見下るせば、佐伯の近郊の平地は、川流
縦横に乱れ、思ひも寄らぬ山蔭に白帆を見ることがあり。
至る処の村落影を倒し、水に投ずるを見るなり。
と。

しかしそれ以前に明治の青年達は、民権思潮の啓蒙
書として、わが国の政治小説の嚆矢とする『経国美談』
『文明東漸史』『惨風悲雨・世路日記』を読んで、夫々
の著者である矢野龍溪・藤田鳴鶴・佐藤菊亭の名は知っ



合冊「経国美談」

ていた。この三青年を生んだ土地が豊後の国佐伯でもあ
る。

木枯らしが小路を吹きぬけてゆく。城山が左右にゆれ
て鳴動しているようである。通り風が武家屋敷の庭から
落ちた枯葉を集めて、吹きだまりで龍巻のように巻き上
げる。明治三年の年が明けて、不安な世情の中にも正月
の気分はあった。裏町は木枯らしに誘われて、町並みを
歩く下駄やぞうりの音が、時折り足早やに聞えてくる。

しかし、武家屋敷はどこもひっそりと静まり返っていた。
新小路の通り風に誘われるように、一人の青年が屋敷門
から現われてきた。通りには誰もいなかった。楠塾の門
を出た青年は、腕組みをしたまま右か左か方向を決めか
ねていた。いつもの帰り道とちがって左を選んだ青年は、
新小路を右へ曲って堀割にぶつかり、腕組みのまま思案
していた。堀割りの角に、許嫁いひよめのいる佐久間邸があった
からである。

「矢野さーん」

矢野は、ふり向きざま小走りに走ってくる青年が、親
友の林（後の藤田茂吉・鳴鶴）であることはすぐわかっ

た。矢野は立ち止ったまゝ彼の近づくのを待っていた。林は嘉永五年、足輕林平四郎の三男として生まれ、この時十九才で色の白い小男であった。佐伯藩では、前年の十二月に士族と卒族に分けた。林茂吉は、最も身分の軽い卒族の子であった。林は才走った顔を真赤にしながら、「とにかくお目出とう。レツ殿の所か」

と、佐久間邸をあごでしゃくってさしながら、「秋月先生や江戸の父君から連絡がありましたか」

「江戸はなからう、東京だ。時代はすでに変わった」

二つ年上の矢野は、ぼつんと言いついて放つて、楠先生への挨拶をすゝめた。

楠文蔚は、帆足万里の門下生として、十六才の時江戸に出て、昌平校で当時の碩学佐藤一斎に師事し、この新小路の一角に家塾を開いていた。矢野や林は、八才の時藩校四教堂に上り、この私塾にも通っていた。

林が消息を聞こうとした秋月先生とは、四教堂の教官で、初め水筑之龍と名乗り、明治以後秋月橋門と称し、日田の広瀬淡窓・筑前の亀井昭陽に師事し、四教堂の儒

官に招かれて、その名声は他藩にも聞こえ、和漢洋書八万冊の蔵書で有名な佐伯文庫をようする藩学の伝統を守り、その謹厳で清廉潔白な儒者らしい教授ぶりは、青年達の人気を一身に集めていた。そして、楠文蔚は補助教官としてその下にいた。秋月先生は、維新後新政府に召されて三河県知事に任命されたが、明治元年十二月には、鎮守府の弁事から葛飾県知事に転任していた。そして矢野文雄の父光儀は、同じく葛飾県大参事として明治二年三月から赴任していた。光儀は維新まで佐伯藩の郡代奉行兼町奉行をつとめていた。矢野の家系は代々学者が多く、四代の黙斎は有名な漢学者であった。

矢野は、佐久間邸の挨拶をすませて林を待っていた。十五才の許嫁レツが嬉しそうに表まで見送った。二人は堀割を渡って寺社奉行所の前に出て大手前の広場にさしかゝる。大手御門の手前には、なつかしい剣術稽古場と四教堂が並んでいる。矢野は、剣術・砲術の免許を受け、十六才で藩主の側近に出仕していた。ふと立ち止った矢野を見て、林はいぶかしげに思った。

「矢野さん、いよいよ決まったのですか」



矢野龍溪
(宮内官時代)

矢野は、うなずいてみせた。

「そうですか」

林は一瞬淋しそうな顔をして、唇をぐいと横に結んだ。矢野は、昨夜祖父の光温から上京の日取りを知らされていた。父の光儀が葛飾県知事に昇格したのを契機に、住みなれた佐伯を離れて、一家の上京が決まったのである。二人は山際の矢野邸に入るまで、無言のまゝであった。

「茂吉、入用な書籍を持って帰れ」

矢野は自分の部屋へ入るなり、茂吉にこう言った。心情としては、できれば林を連れてゆきたかった。英才は英才を知る。友情よりも茂吉の才能を惜しんでやまなか

った。一方林は、別れと共に新知識の吸収源を断たれる思いだった。矢野の知識は、儒教的訓育を祖父に受け、西洋の新知識を父に授けられ、維新の改革を肌と感じて知っていた。鳥羽伏見の戦には、藩主と共に上洛し、分隊長として禁裡御門の警衛に当り、当時から藩外の空気をじかに味わいながら、ひそかに期するところがあった。「一里に届く大砲」と「大汽船」の夢は、少年時代からその探求心を培っていた。そして、林はこれらの知識を折にふれ大きな眼を輝かせながら聞き入るのが常であった。矢野の頭には、「これからの日本には人材が要る」父のこの言葉がいつも脳裏をかすめていた。年は若い、四教堂きっての論説家としての林を、佐伯に埋もれさずのが残念でならなかった。貧しい林の無念さも矢野が一番よく知っていた。しかし、口に出すのをはぐかっていた。林は林で、良き兄とも慕い、ときには競争相手や相談相手であった矢野を失うことで、自分の進路に一抹の不安がよぎっていた。

「矢野さん。これからの日本はどうなるのでしょうか」

林は、自分の進むべき道を国の方途に投影して考えていた。現に、新大政官政府のもとで、各藩の下級武士は

食うのも困っていた。佐伯藩でも、卒族は一石八斗、二等三等は縦前の僅かの給米割合で給せられていた。なすべきこともなく、生活を考えねばならない林にとって、矢野の上京はうらやましくもあった。

「茂吉、そんなことがわかるもんか。新政府だって今から探すんだ。おやじだってそのために働いている。

徳川の日本がよいか天皇の日本がよいか、その方向を探すためにも学問が必要なんだ。時がくればなんとかなる。学問だけは忘れるなよ。維新の後始末は青年の力が要る。必ずそんな時代がやってくる。その証拠に、各藩の儒官は皆新政府の職を得ている。悲観することはない。東京の状況は、便のあり次第知らせてやるよ」林は、矢野の話聞きながら成程と思った。秋月教官も矢野の父も一藩の主役ではない。藩に名だたる学識者である。学問によって立つ道もあると思った。

「茂吉、東京にはいい学校も書籍もあるう。欲しい書物はとっておけ。時がくれば上京の道も開ける。東京で又会えるかも知れぬぞ」

林ははっとした。先輩に東京での再会をいわれて、「そうか、その道もある」「時がくればか」と、一縷の

望みを期待しながら体が熱くなるのを覚えた。暮れ近く、林は矢野邸を辞すとき、両手に抱えこむほどの書物を貰って帰った。

矢野一家の上京は、この月の廿一日と決まって、その出立準備に忙がしい郎党達の働く姿が、城山下ろしの木枯らしを吹き飛ばすような勢であった。(つづく)

(36ページの続き)

佐伯市中心部はとかく住民の交流が頻繁で、それだけ移動が多く、市内でも農漁村部は比較的特有な苗字を温存している。そして市部、郡部を通じて山間部には地域の歴史的・伝統的な苗字が多く、海岸部には歴史的な面より海上交通を思わせるものや、職業的意味の強い苗字が多い。

これだけだいたい総論的な第一稿を終ったわけだが、次は最多数の苗字からとりあげ、地域的な考察をして行くつもりである。ここでちょっと説明しておきたいのは表題の「佐伯地方の姓氏」だが、姓氏の意義は別として私の場合、苗字と同義にあつかい、全体的に苗字ということばを使った。(つづく)